

薬害根絶フォーラム 2025 年 11 月

菅（かん）みつ子

皆さん、こんにちは。

今日は、私自身の生い立ちと、そこから感じている大切なことについてお話しします。

私は 1962 年 3 月、京都府立医科大学病院で、両親にとって初めての子どもとして生まれました。

当時は、今のようにエコー検査は発達しておらず、五体満足で生まれてくると信じて疑わなかった両親にとって、私の小さく曲がった親指のない手を目にした瞬間のショックは、想像を超えるものだったと思います。

体が弱かった母を気遣い、退院まで私の姿を見せなかったという父。けれど母は、私の手について知ったとき、本当に驚いたとだけ話してくれました。

ずっと後になって、それが妊娠中に飲んだ胃薬の副作用であることを知ることになります。

それでも両親は、私を愛情いっぱい育ててくれました。

外を歩くと、じろじろ見られることは当たり前。電車で座っていても、私に気づくと、隣の人が席を立て別席に移ることがありました。旅行先では、予約していたにもかかわらず、旅館の入り口で断られたこともあります。

そのようなことがしょっちゅうあったにもかかわらず、両親は、私をいろいろなところに連れて行ってくれました。おそらく将来いろいろな場面でも私がくじけることがないようにと、思っていたことだったのではないかと思います。両親の気持ちを思うと、胸が痛くなります。

幼稚園に入るとき、公立では受け入れてもらえず、ようやくカトリック系の幼稚園に入ることができました。しかし条件は「自分のことは自分でできること」。母は制服のボタンをすべてマジックテープに付け替え、体操服や下着には指を引っかけてさげられるように、リボンで輪を作ってつけるなど、私が一人でできるよう、手間を惜しまず続けてくれました。これは小学校高学年になるまで続けられたのです。

両親は、私が大人になって自立できるように、英語や書道を習わせてくれました。幼い頃は厳しいと感じて嫌になることもありましたが、今ではその厳しさが私のためを思っていたことだったと、理解できます。

学校生活では、できないことに直面することが多くありました。

鉄棒も跳び箱もできず、体育の時間は苦痛でした。リコーダーもうまく吹けず、ハーモニカだけが唯一できる楽器でした。中学校ではテニスラケットをうまく握ることができず、

見学しながら友達の応援だけをしていました。

もしできるなら、今でもバイオリンやピアノを弾きたいし、ゴルフもしてみたいと思っています。

父は、何度も転勤の話をもらっていましたが、そのたびに「みつ子が新しい土地でいじめにあったらかわいそう」と、昇進が約束されていても断り続けていたことを、後になって母から聞きました。

今でも、エレベーターなどで私の手を見た子どもが親の後ろに隠れたり、興味半分に声をあげたりすることがあります。その時、多くの親御さんは子どもを守るように距離をとります。私は気にしないようにしていますが、私の子どもたちはきっと嫌な思いをしてきたはずです。それでも、彼らは私に一切そういうことを話しません。

今、私は夫や子ども、そして素敵な同僚たちに恵まれ、とても幸せに暮らしています。ただ、年齢を重ねたことで、できていたことができなくなり、腕が短いために肩が内側に丸くなり、呼吸機能や背骨、頸椎に影響が出始めています。肺活量は何年も前から 80 代の方と同じくらいだといわれ、日常生活でも家族の助けが必要になってきています。

ほんの一錠の薬が、多くの人の人生を変えることがあります。またそれが一時のことではなく、長い人生にずっと影響し続けているのです。

薬を作る人、安全性を検査する人、処方する人、販売を許可する人、販売する人……
薬に関わるすべての人に、この事実を絶対に忘れないでほしいと、心よりお願いします。

ご清聴、ありがとうございました